

氏 名 西 井 凉 子

学位（専攻分野） 博士(文学)

学 位 記 番 号 総研大乙第29号

学位授与の日付 平成9年3月24日

学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当

学 位 論 文 題 目 南タイにおける実践宗教

—ムスリムと仏教徒が混住する村落の事例から—

論 文 審 査 委 員 主 査 教 授 黒田 悦子
教 授 中牧 弘允
助 教 授 田村 克己
教 授 内堀 基光（一橋大学）
坪内 良博（京都大学）

本論は、南タイのムスリムと仏教徒が日常生活圏を共有して混住する村落における宗教現象を、日常的経験のリアリティから理解しようとする試みである。本論の視点は、人々の行為や経験から独立した宗教的観念ではなく、その意味をいちいち問うことなく行っているような日常生活の大部分をしめる慣習的行為（ブルデューのいうプラクティス）に焦点をあてる。ここでいう実践宗教とは、人々が日常生活において社会関係を取り結びつつ行為する過程に見られる宗教現象を指している。しかし、村では稀ではないムスリムと仏教徒の通婚に際しては、必ずどちらかが改宗して夫婦の宗教を同一にする必要があるとされ、そのことが実行されていることは、ブルデューの想定しなかった慣習的行為そのものが選択されるようになる過程を示している。例えば、ムスリムとして育つうちに身につけた慣習的行為も、通婚により仏教徒となることで、部分的に元のものを残し、また新たなものを採用して生活をやりくりしていくような、慣習的行為の選択や操作が見られるのである。

村の日常生活にとって重要な社会関係としての親族関係は、エゴを中心とした双系的なキンドレッドである。その特徴は、一組の夫婦を中心とした家族の同居するメンバーが頻繁に入れ替わるメンバーの流動性にある。そのため、同居する集団としての家族とその他の親族の間の境界は必ずしも明確には引けない。また、婚姻後の居住も夫方居住と妻方居住はほぼ半々であり、しかもその居住は固定的なものではなく、職業の変化や家族の死などによって状況が変われば容易に移動する。ところが、ムスリムと仏教徒が通婚した場合、夫婦は同じ宗教であるべきだとみなされているため、通常は同居する家族も宗教を同じくする。このことから、宗教の違いは同居する家族と宗教が異なる親族の間のメンバーの流動性を制限して、家族と親族の間に差違化をもたらすことになる。また、ムスリムと仏教徒の通婚は、夫方親族と妻方親族との間にも宗教の違いによる差違化をもたらす。つまり、ここでは、宗教の違いが社会関係における差異化をもたらす局面が見えてくるのである。

宗教のもたらす差異化の第一の点、家族と親族の差異化の実態を検討するため、あるムスリム-仏教徒婚者のライフヒストリーを中心に、通婚者の家族はどのような日常生活を行い、生まれ育つうちに自然に身体化した宗教的慣習行為の違いを、いかに調整しているのかを見る。そこから、改宗というのはイスラームから仏教へとレーンを変えるように一時点で完了するものではなく、生活の中でそれぞれが自らに合うように選択し、調整していく過程を伴っていることが明らかになる。

宗教の違いがもたらす差異化の第二の点である夫方親族と妻方親族の差異化の問題は、あるムスリム-仏教徒婚者の死をめぐる事件から考察する。改宗者は異なる宗教をもつ親族間の結節点になるが、その死は社会関係全体を変化させ、潜在的であった宗教の違いによる夫方親族と妻方親族の対立が、葬式のやり方をめぐって顕在化するきっかけとなる。しかし、この事件の場合、その対立はムスリムと仏教徒の宗教的対立ではなく、親族関係における内的な葛藤とみなされ、事件後再びムスリム側と仏教徒側の親族の関係の再調整がはかられた。ここから村においては、宗教が社会関係にもたらす差異化は、イスラームや仏教といった宗教的な実践方法の違い（遺体の埋葬方法など）そのものによるのではな

く、むしろ死者に功德（ブン）を送るという宗教的行為の動機を共有した上で、死者をめぐる関係が争点となっていることが見えてくるのである。

一方、村では宗教の違いが関係の差異化に結びつかない局面もある。それは、祖先と子孫という儀礼的な系譜関係であるチュアサーイにおいて見られる。ここではムスリムの祖先からも仏教徒の祖先からも願かけ（ボン）のやり方が引き継がれるという意味で、二つのチュアサーイは共存するものである。この局面においては、一人の人間のうちにイスラームと仏教は共存しうるものとなる。例えば村で見られるムスリムの出家慣行は、仏教徒とも共有された願かけの方法の一つとして考えられる。

このように、村における宗教現象には、宗教の違いが関係を差異化させる局面と、異なる方法として一人の人間において共存し、それゆえ関係を差異化させることのない局面の二つの方向が見られる。その違いは次のように説明することができる。関係を差異化させる宗教の局面は、当人もしくは近親者の死後の功德（ブン）をめぐる行為との関連で見られる。ブンを中心とする宗教的行為の結果は、来世においてしか得ることができない。それゆえブンの確保は、現世においてブンを送る特定の関係を確立することによってのみ、来世における結果の保証となる。そのことが、特定の関係、例えば親子関係を他から差異化し優先することで、宗教の違いが社会関係の差異化をもたらすことになると思われる。一方、チュアサーイによって継承される願かけを中心とした宗教的行為の結果は、現世において確かめられるものである。ある系譜関係を想定して祖先に願かけをし、たとえ、目的が達成されなくとも、他の方法により、所定の結果が得られるまで様々な関係を模索することができる。このような儀礼的にのみ継承されたり構築されたりするチュアサーイのような系譜関係においては、宗教による方法の違いは共存する原理となりうると考えられる。

こうした考察から、宗教の差異化する局面と共存する局面は、現実の生活過程における宗教的行為と社会関係との関わりにおいて捉えることができると結論づけられる。人々が生活の中で実践している宗教現象のリアリティは、人々が日々選択し、行為することで作り出す変化と、その中で既存の宗教的知識や概念を組み合わせ、自らに合うように生活の継続性を保とうとする営為との接点において捉えることができる。そうした実践宗教からのアプローチは、宗教が社会的対立に結びついていくような極めて現代的な問題に対しても、人々の日常的な営みのプロセスに目を向けることで、新たな視角を提供する糸口ともなりうると思われる。

本論文はマレーシアと国境を接する南タイの西海岸に位置する村落においてムスリムと仏教徒が混住する状況における日常の宗教的実践を記述・分析したものである。約二年のフィールドワークにもとづく事例研究として貴重であり、一貫した分析方法と論理性が本論文に精彩を与えている。

第一章では、宗教的観念や構造ではなく、日常生活の慣習的行為としての実践宗教を研究対象にすることが表明されている。

第二章では、調査地のムスリムがタイでは周縁的存在であることが指摘され、仏教徒との混住の歴史的経緯、両者の互酬的交換関係（祭り、結婚式、葬式への相互参加）が挙げられ、宗教による差異化や葛藤が顕在化しない状況がのべられる。

第三章では、イスラーム、仏教、精霊信仰が排他的な三つの知識のシステムとして現われず連続線上にあり、個人が三つの知識を組み合わせ選択していく過程に宗教的リアリティがあることが論じられる。

たとえば、ムスリムと仏教徒はブン（功德）とバーブ（悪業）という共通の用語で宗教的行為を説明するが、教義上の理解には違いがあり、その「慣習的行為」（パサー）にも差がある。そして、精霊信仰は苦悩や危機への対処法としてムスリムにも仏教徒にも採用されており、村の守護霊も両者に受容されている。

第四章では、世帯（居住家族）とキンドレッド（エゴを中心とした双系親族）の実態が説明され、改宗という行為が家族と親族関係にもたらす差異化と葛藤が概括される。ちなみに、ムスリム－仏教徒婚は約20%にのぼり、夫婦の宗教は同じでなければならないとされるため、双方向の改宗が半々に起こる。この結果、双方の家族と親族関係に宗教の違いによる差異化がもたらされることが多いのである。

第五章では、ある仏教徒（ムスリムである妻に従い改宗し、後に仏教徒に戻る）のライフ・ヒストリーが語られ、改宗者の経験する矛盾・葛藤・選択・調整の過程が生き生きと記述される。

第六章では、改宗者当人（仏教徒からムスリムになった男性）の死後、夫方と妻方の親族が遺体を奪い合うという事件が記述・分析される。争点は死者へのブンをどの生者が送るかにある。

第七章では、先祖と子孫の系譜関係（チュアサーイ）では子孫が様々な儀礼時に行なう願かけ（ボン）の行為により子孫は先祖とつながっており、ムスリムであれ仏教徒であれ、宗教の差が差異化をつくらないことが指摘される。

以上の記述と分析に対して、課題としては、1) 調査地域の特殊性、2) イスラーム、仏教の教義とローカルな現われ方の差についてのより深い知識の必要性、3) 精霊信仰の分析的把握の必要性、4) 社会関係を中心とする分析から抜け落ちた宗教性、などが指摘された。これらの指摘を将来の研究に生かすことが望まれるが、本論文は宗教の共生状態の研究に貢献することは確かであり、論述の整合性には高い評価が与えられるものと思われる。

以上のことから、本論文は学位を授与するに値すると認定する。